

待ちに待ったスイカだ！

2学期が始まりました。暑く短かった夏休みにもかかわらず、子供たちの元気な声が、教室にこだましました。「とっても元気な人」と聞くと、ほとんどの子供たちの手が挙がりました。いいスタートです。

そんな「パワフルっ子」。外は、35度近くあるにもかかわらず、「ぼくたちのスイカ、見に行きたいよ」「スイカ、大きくなってたよ」などと、口々に畑に行きたいコール。特に、1学期の終わりに、小さなドッジボールくらいになっていたのを見ていたので、どうなったか気になってしかたがなかったのでしょうか。

そんな思いを胸に、子供たちは足取りも軽く畑に向かいました。自分たちの野菜を収穫した後、待ちに待ったスイカを見に行きました。

「キャー、スイカがある」「ここにもある。あそこにも」畑いっぱい、次々と起こる歓声。両腕でやっと抱えられるくらいの大きなスイカたち。叩くと、ボンボンと低い音。食べごろのスイカで



す。力持ちのRさんやTさんが、落とさないように教室まで運びました。教室に向かう途中、「スイカ祭りをしたい」など、大物を食して楽しみたいという気分でした。



冷蔵庫で冷やしたスイカを食べる日が来ました。子供たちは、どんな音がするのか、聞き耳を立てています。ランチルームに、包丁が入る音。「ぼくは、おなかがいっぱいだから、一切れにしよう」「私は、二切れかな」などと、愉快的話が聞こえてきます。

「わあ、きれい。黄色いスイカだ」「オレンジのところもあるよ」「甘いー。こんな甘いスイカ、食べたことないよ」「先生、おかわりしていい」などと言いながら、子供たちは大喜びでスイカをほおばりました。

Sさんの感想です。

…わたしは、スイカを食べるのをずっとわくわくしながらまっていた。なぜかという、わたしは、スイカが大すきだからです。わたしは、まっかなスイカをそうぞうしていました。ところが、先生のわったスイカは黄色だったので、びっくりしました。食べてみると、あまくておいしいスイカでした。とてもおいしかったので、4切

れも食べてしまいました。とてもおいしかったです。まだまだ食べたいと思いました。

Aさんの感想です。

…スイカの色は、黄色でした。わたしは、スイカを4切れ食べました。カブト虫のように、白いところまでいきおいよく食べました。なぜなら、スイカがとても好きだからです。本当は、かわも食べたかったです。でも、たっぷり食べられたので、十分まんぞくしました。なぜかメロンのあじもしました。また、スイカを食べたいです。

SさんもAさんも、よほどスイカがおいしかったのでしょう。二人とも、次々とお代わりに来て、4切れのスイカを平らげてしまいました。自分たちの手で育てたスイカだからこそ、おいしさが増して感じられたのでしょう。スイカを食べた次の日の日記には、いつもより気持ちがいっぱい詰まった文章が書かれていました。

この次は、秋冬野菜の栽培に挑戦です。おいしいダイコンやニンジン、ホウレンソウなどが収穫できるといいですね。

やさしい心でいっぱい！

2年生の学校農園は、きゅうりの時期が終わり、ピーマンやミニトマトの収穫ラッシュに入りました。いつも、子供たちは袋いっぱいの野菜を惜しげもなく、みんなに分けています。そこで、どんな気持ちで分けているのか、聞いてみました。

先生：みんなどんな気持ちで、自分の野菜を分けてあげているの？

K：私は、少なかったらあげたくないけれど、多くとれたら、あげていいと思っています。

T：ぼくは、多いと家で食べられないからあげます。

S：私も似ていて、5個取れたら2個、1・2個なら0個かな。

K：私は、大きいのは食べてみたくて、小さいのはあげていいと思う。でも、大きいのも、混ぜて分けてあげてる。

C：えっー。なんで？

K：大きいのは、家で食べたいという気持ちはあるけれど、もらってくれた人も、喜んでくれるからそうします。

T：もらったら、けっこううれしい。

R：めっちゃ、うれしい。

H：私は、分けてあげた友達が「おいしい」と言ってくれたら、自分で育てるのをがんばったなと思えるから。だから、もっとあげようと思う。

この話合いを聞きながら、子供たちは自分の損得を考えながらも、自分の野菜が相手の喜びになることをうれしく思って、自然な気持ちで分け合っていたことに、心洗われる思いがしました。

話が終わると、自分の気持ちが友達に届き、野菜をもらった友達から「もらったら、結構うれしい」「めっちゃ、うれしい」という喜ぶ気持ちを聞くことができたことで、みんなの表情はさらに優しく輝きました。

